

▽決勝戦

A・ヘーシンク ○袈裟固 神永

嗚呼、遂に決戦の時^あは来た。いよいよ体重無差別の決勝戦である。思い起せば3年前のクールタン体育館（於パリ）。日本人選手3人が、今、目の前に堂々と自然体で立つヘーシンクに屠^{ほぶ}られたのである。その瞬間、世界柔道の覇権が日本の手を離れ欧州に移ったのだ。雪辱の時。ここに再びそのヘーシンクと相対^{たひ}峙^じする世紀の一戦の時である。

神永、顔面やや青白く、白紐^{びも}を付けて場内アナウンスの終わるのをじつと待つ。片やヘーシンク、場内アナウンスの終わらないうちに登場。顔面を真っ赤にして神永の出場を待つ。試合開始。互いに両手を高く揚げ、「さあ来い！」とばかりに向かい合えば、満場騒然、興奮が頂点に達する。ヘーシンク、更に跳びはね、神永を挑発しながらつかみに来る。神永は冷静。ヘーシンク、慎重に相手の出方を待つ。1分過ぎ、ヘーシンク、内股。浅い。神永、動じず。ヘーシンク、組み方を嫌って持ち替えるところへ神永、内股。効かず。ヘーシンク、支釣込足を繰り返す。神永、良く防ぐも精一杯の感あり。寸分の油断も許されない。ヘーシンクとは言え、矢張り、神永の大内刈、体落に対して余裕は無く、支釣込足も崩れる。神永、寝技で攻める。しかし、寝技も強いヘーシンク。神永、攻め切れず。

4分過ぎ、ヘーシンク、支釣込足。神永、ぐらつく。ヘーシンク、神永の肩越しに帯を取り、

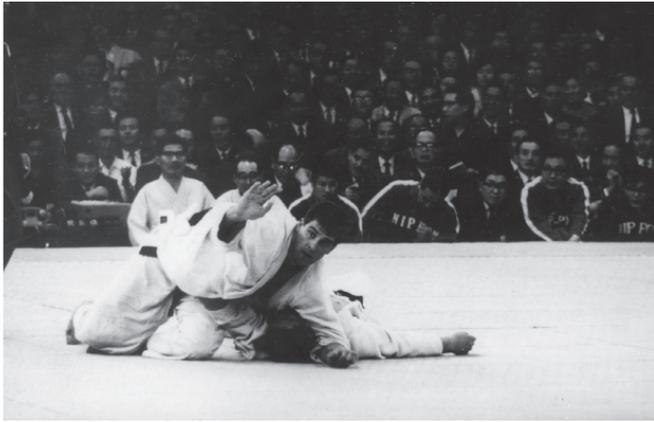
寝技に誘うが、神永、その都度必死に振り切り、体落で攻め返す。

5分、ヘーシンク、再度支釣込足。これは神永の動きを捉えた。神永、大きく横転。ヘーシンク、寝技へ。決めるかに見えた。が、神永、必死に動き、もつれて反転し場外へ。中央へ戻り、一呼吸して神永、大外刈。効いたがヘーシンクと同体になって場外へ。

7分、神永、大内刈。ヘーシンク、体が傾むくも場外。この後、驚くべき光景が見られた。場外でヘーシンクが神永を軽々と抱き上げ、場内に入れたのだ。さながら大人が子供を抱いて移動させるような風景。一瞬静まり返った場内が、一転してため息に変わった。この時誰もが同じ思いを抱かせられたことだろう、嗚呼、何という体力差であることよと。神永はそんな相手に国を代表して戦っているのである。

柔道衣を直して試合再開。神永、渾身こんしんの力で掛けた体落。ヘーシンク凌ぐ。寝技に誘う。神永、嫌って立つ。8分半、神永、大内刈から体落へ連絡。ヘーシンク、これを潰して寝技。必死に逃げる神永、危ない。ヘーシンク、神永を左袈裟固に抑え込む。神永、このまま行けば待つものは悪夢……。総身の力を振り絞って跳ね上げようとしますが、ヘーシンクの固めは解けず。磐石の袈裟固と哀愁すら漂う神永の奏功なき抵抗。時計の針だけが無情に過ぎる。10秒、15秒、20秒、25秒、そして……。主審の右手が高く挙げられ、「一本」の宣告。所要時間9分22秒。

ヘーシンクが抑え込みを解こうとした時、応援していた一人が畳に上がろうとした。ヘーシン



ヘーシンクは抑え込みを解く時、喜びのあまり興奮して試合場に駆け上がって来ようとした応援者に対して、神聖な試合場に靴を履いたまま上がって来てはいけなと、あわてて合図した

クはあわててその人に手のひらを向け、来るなど合図。立ってその人の前に立ちはだかり、席へ戻れ、試合場にかかるな、と強く明瞭なジェスチャーで追い返した。その間、抑え込みを解かれた神永は、仰向けのまま武道館の高い八角形の天井を見上げ、しばし起き上がらなかつた。その胸に去来したものは一体何だつたらうか。

主審は形式に従い、ヘーシンクの勝利を宣告、指示。戦い終えた両者は自ずと歩み寄り、握手し、肩を抱き合い、相互の健闘を讃え合つた。この美しい姿に、観衆は割れんばかりの拍手を送り続けた。試合場の下に陣取る日本の監督、コーチ、前日までに試合を終えた選手達が、複雑な思いでその光景を見守つた。

重量級の猪熊は独りうつむき、微動だにせず、片手で顔を覆い隠していた。声を殺して嗚咽し、滂沱の涙を止められなかつたからである。

■識者の観戦評

大会後、講道館はアンケート調査^②を実施した。ここに全てを載せて読者諸賢にも味読して戴き、柔道国際化の何たるかを議論して貰いたいのだが、紙幅の関係で一部のみ掲載し、議論の材料として頂きたい。

.....◆.....

△画家 伊原宇三郎

軽量級と中量級はテレビで、重量級と無差別は武道館で間近に見ました。軽、中はあつけない位で断然日本が強く、この実力差を縮めることは、彼らにとつて容易なことではな
いと思います。少しの不安も無く、日本柔道も大したものだと改めて見直しました。

猪熊君も立派でした。しかし、決勝戦が僅差の優勢勝ちであったことは重大で、今はまだ外国人選手の方が少しばかり弱いのが、これが同格となり、次に追い越す選手の現れることは、当然に日本の柔道界は予定して掛からねばなるまいと思います。無差別に至っては、神永君は貧乏くじをひいたと同情せざるを得ません。本当に気の毒です。

今の日本では誰が出ても駄目だということはヘーシンクが初めて日本へ来た時から私には予見されました。松本安市監督などが事前に気休めから声をしきりに立てていましたが、

これも惨めな事でした。神永君は得意の大技ばかりを覗うかがっていましたが、その上に例えは大沢君〔大澤慶已現十段。今牛若丸とも称された釣込腰、足技の名手。村田註〕のような素晴らしい足技の切れ味を身に付けられなかったものでしょうか。

この後で女子バレーボールのニチポーが鮮やかに勝ってくれたから、私達は慰められています。日本の柔道界としては悲壮な決意がなくてはならないことと思います。

▽作家 志賀直哉

テレビで見ました。前の木村―力道山の勝負でも今度の場合でも、最初から体力の差で勝てそうもないように思いました。昔の永岡さん〔故永岡秀一十段。横捨身の名人。村田註〕のような人だったらどうだったろうと考えました。合気道を入れよという説も考えてみる必要があるのではないかと思いました。

▽レスリング会長 八田一朗

TVで見ましたが、ヘーシングの実力は私の予想していた通りでした。レスリングを知っておくことは、柔道の将来の為大切なことと思います。

▽東大教授 猪飼道夫

オリンピックで日本が如何に活躍するかということは、全ての日本人が固唾かたずを呑んで見守っていたことである。そしてヘーシンクに再び敗れたことがハッキリした今、人々の胸に重苦しい何物かが覆いかぶさったに違いない。その何物かについての考え方は人によって異なる筈はずである。私はこのことによつて日本柔道が急にどうなったとか、急にどうならなくてはならぬとかは思わない。ヘーシンクが日本の柔道を学び、日本人と同じ技術を修得し、彼の優れた体力がこれに加われれば、日本人の誰をも負かすことが出来るということは当然のことである。それが国際的なスポーツの世界ではなからうか。

仮に日本の柔道家が日本人にだけ『秘術』というようなものを教え、外国人にはこれを教えないということがあつたとすれば、小さい日本人が大きい外国人を手玉に取る事が出来ただろう。しかし、これでは既にスポーツではなくなる。

ヘーシンクが王座についたということは、日本柔道の一卒業生が一人前になったということではなからうか。日本の柔道はインターナショナルの資格を持ったスポーツなのだということを確認されたことでもある。

しかし、それで問題が全て解決された訳ではない。問題は、日本人が本当に日本人の体力を限界まで伸ばして戦った結果であつたかどうかということである。又ヘーシンクの持

つ技術以上のものが、既に日本には無いのだろうかということである。

柔道がスポーツとして国際的に出た以上は、体力のトレーニングについても技術の練磨についても、他のスポーツと同じようにもっと新しい角度から研究されなくてはならないと思う。

.....◆.....

▽サンケイスポーツ 戸咲金三

勝者があれば敗者がある——スポーツマンに課せられた宿命である。

ヘーシンクの巨体が神永にのしかかった。日本武道館の一隅に陣取ったオランダの応援団が一斉に立ち上がる。何とか苦境から脱しようとする神永が小さく見える。選手席にいる猪熊が顔を伏せた。松本監督、曾根（康治）コーチは瞬き一つせず見守る。心なしか目が潤んでいるように見える。2階席の神永夫人は目を閉じている。神に祈っているかのよう.....。

大時計の針の動きが馬鹿に速い。『二本、それまで！』——全ては終わった。サッと立ち上がりかけたヘーシンクが、大声でわめきながら手を広げた。喜びの余り場内に飛び上がるうとしたオランダ人を制しているのだ。『騒ぐんじゃないっ』とでも言いたいのだろうか。まさに王者の風格そのものである。

やがて立ち上がった神永が服装を正し礼をした後、ヘーシンクに歩み寄った。堅い握手を交わしながら言葉を交わしている。「おめでとう」「有難う」とでも言い合っているのだろう。ヘーシンクが微笑^{ほほえ}んでいる。神永も微笑^{ほほえ}んでいる。ついさつきまで死力を尽くして戦い合った2人とはまるで別人のようだ。

東京オリンピックは数多い劇的なシーンを生んだ。家を捨て子供を捨てて魔女『ニチポー貝塚』を育てた鬼の大松がソ連を破った直後、愛嬢を抱きかかえた姿もその一つだが、ヘーシンクが試合場内へ喜び勇んで入ろうとするオランダ人を制した時の厳しさ、そして敗者神永が見せた笑顔もまだ私の目の底に焼きついている。

試合終了後、『思う存分やった。悔いはありません』と語る神永に、取り巻いた報道陣からは何の言葉も出なかった。いや、聞けなかったのだ。

日本選手の控室では松本監督、曾根コーチ、そして猪熊、岡野、中谷と全選手が泣いていた。だが神永だけはグッとこらえていた。ここでも報道陣は遠巻きにしているだけ。そんな中で神永選手のお父さんが各コーチに、『有難うございました』と頭を下げていた。

スポーツ記者という立場を離れ、私は一柔道ファンとして勝って欲しかった。奈良の天理大学に於ける合宿で、三輪明神の参道を一番しんがりから走り続けていた神永。金メダルの十字架を背負わされ、黙々と精進していた神永。苦しい毎日だったろう。

たとえ負けたとは言え、誰かがやらなければならぬこの大役をやつてのけた神永には頭の下がる思いで一杯だ。ヘーシンの手を握りながら笑っている神永の顔が浮かんで来る……」

■ 競技スポーツ JUDO の 驀進

来し方、柔道が海外進出した足跡を見て来たが、その成果とすべき国際的普及の証しは、五輪正式種目として採用されたことである、として異論はあるまい。だが忘れてはいけない認識が厳然としてある。それはあくまでも競技スポーツとしての柔道普及の証しということであり、五輪正式種目に採用されたからと言って、柔道の総てが普及したと捉えるのは正しい認識ではないということである。

では柔道に対する正しい認識とは何か。言わずもがな、柔道とは、「体育・勝負・修心」という狭義の目的を持ち、「形と乱取」「講義と問答」という4つの具体的方法を持ち、究竟の目的を、「己の完成 世の補益」としていること、及びその実践であるということである。故に広く、深い。嘉納治五郎はこれを、「精力善用」「自他共栄」と8文字に表現した。

競技スポーツとしての柔道は、広く深い柔道の一側面、乃至一要素という位置になる。である